

## Majorization による norm の評価

北大応電研 安藤 毅 (Tsuyoshi Ando)

### §1. 目標と準備.

以下では ( $n$ 行 $n$ 列)の行列の全体を  $M = M_n$  であらわし、Hermitian 行列の全体を  $H$ , skew-Hermitian の全体を  $\mathcal{H}$  で、また unitary の全体を  $U$  であらわす。

正規行列  $A$  の固有値を  $\{\lambda_1, \dots, \lambda_n\}$  としたとき、これを対角線上に並べた対角行列を  $Eig(A)$  とかく。  $\{1, 2, \dots, n\}$  の置換  $\sigma$  に対して  $\{\lambda_{\sigma_1}, \dots, \lambda_{\sigma_n}\}$  からできる対角行列を  $Eig_{\sigma}(A)$  とかく。

われわれの問題は、 $M$  に norm  $\|\cdot\|$  が与えられたとき、

$$\|A - B\| \leq \sigma \cdot \max_{\sigma} \|Eig(A) - Eig_{\sigma}(B)\| \quad (1)$$

が ( $n$  に無関係に) 全ての正規行列  $A, B$  に成り立つような  $\sigma$  の最小値  $\alpha$  を

$$\min_{\sigma} \|Eig(A) - Eig_{\sigma}(B)\| \leq \beta \|A - B\| \quad (2)$$

となる  $\beta$  の最小値を評価しようとするところにある。

norm があまり一般であると、 $n$  に無関係な  $\sigma, \beta$  の評

価は難かしいし、また実際的でないので、以下では unitarily invariant な norm のみを考察する。ここで norm  $\|\cdot\|$  が unitarily invariant とは

$$\|\sigma T \tau\| = \|T\| \quad (T \in M; \sigma, \tau \in U)$$

が成り立つときを云う。よく知られたように ([5], [9], [10], [12])

そのような norm は  $\mathbb{R}_+^n$  上の symmetric gauge function  $\varphi$  と

$$\|T\| = \varphi(\lambda_1(T), \dots, \lambda_n(T)) \quad (T \in M) \quad (3)$$

の関係で - 対 - に対応している。ここで  $\{\lambda_j(T)\}_j$  は  $T$  の特異値、すなわち  $|T| = (T^*T)^{1/2}$  の固有値である。最も親しまれる  $p$ -norm は  $\varphi$  として  $\varphi(t_1, \dots, t_n) = \sum_{j=1}^n t_j^p$  ( $1 \leq p < \infty$  のとき)、 $= \max_j t_j$  ( $p = \infty$  のとき) をとったものである。  $\varphi$

と (3) で結び  $\|\cdot\|$  を明示するために  $\|\cdot\|_\varphi$  とかく、特に

$$\|T\|_p = \begin{cases} \left\{ \sum_j \lambda_j(T)^p \right\}^{1/p} & (1 \leq p < \infty) \\ \max_j \lambda_j(T) & (p = \infty) \end{cases}$$

である。

norm  $\|\cdot\|_\varphi$  に関する (1), (2) の optimal な  $\sigma, \delta$  をそれぞれ  $\sigma_\varphi, \delta_\varphi$  と書こう。特に  $p$ -norm に対しては  $\sigma_p, \delta_p$  とかく。正規行列  $A, B$  を、例えは  $\mathbb{H}$  に制限したときの optimal な  $\sigma, \delta$  を  $\sigma_\varphi(\mathbb{H}, \mathbb{H}), \delta_\varphi(\mathbb{H}, \mathbb{H})$  とあらわす。同様に  $\sigma_\varphi(\mathbb{U}, \mathbb{U}), \sigma_\varphi(\mathbb{H}, \mathbb{S}\mathbb{H}), \dots$  等が考えられる。

正規行列  $A$  の unitary 軌道  $= \{V^*AV : V \in \mathcal{U}\}$  を  $A(\mathcal{U})$  と書こう。  $A$  の  $V^*AV$  の固有値は同じであるから (1), (2) の関係から,

$A(\mathcal{U})$  と  $B(\mathcal{U})$  の  $\|\cdot\|_p$  による最長距離  $\leq \delta_p \max_{\sigma} \|E_{i\sigma}(A) - E_{i\sigma}(B)\|_p$  かつ

$A(\mathcal{U})$  と  $B(\mathcal{U})$  の  $\|\cdot\|_p$  による最短距離  $\geq \delta_p^{-1} \min_{\sigma} \|E_{i\sigma}(A) - E_{i\sigma}(B)\|_p$  が出る。

unitary invariant な norm に関する不等式を導くのに majorization の考えが有効であることがよく知られている ([1], [5], [7])。  $\mathbb{R}^n$  の vector  $x = \{x_j\}_j, y = \{y_j\}_j$  に対し majorization  $x \prec y$  が成り立つとは

$$\sum_{j=1}^k x_{[j]} \leq \sum_{j=1}^k y_{[j]} \quad (k=1, \dots, n-1) \quad \text{かつ} \quad \sum_{j=1}^n x_{[j]} = \sum_{j=1}^n y_{[j]}$$

のときである。ここで  $\{x_{[j]}\}_j$  は  $\{x_j\}_j$  を減少順に並べ替えたものである。上で最後の等式を不等式にしたときには sub-majorization と呼ぶ  $x \prec\prec y$  と書く。

majorization に関する基本的な性質として次が有用である ([1], [5], [8]):  $f(t)$  が  $x_j, y_j$  すべてを含む区間で凸な

$$x \prec y \Rightarrow \{f(x_j)\}_j \prec\prec \{f(y_j)\}_j \Rightarrow \sum_{j=1}^n f(x_j) \leq \sum_{j=1}^n f(y_j). \quad (4)$$

$g(t)$  がそのような区間で凹関数なら,  $-g(t)$  を考え (4)より

$$x \prec y \Rightarrow \sum_{j=1}^n g(x_j) \geq \sum_{j=1}^n g(y_j). \quad (5)$$

sub-majorization に関しては,  $f(t)$  が増加, 凸ならば

$$x \prec y \Rightarrow \{f(x_j)\} \prec \{f(y_j)\} \Rightarrow \sum_1^n f(x_j) \leq \sum_1^n f(y_j). \quad (6)$$

symmetric gauge function  $\varphi$  の関係では ([1], [5], [9])

$$x, y \in \mathbb{R}_+^n, x \prec y \Rightarrow \varphi(x_1, \dots, x_n) \leq \varphi(y_1, \dots, y_n)$$

したがって (3) より

$$A(S) \prec A(T) \Rightarrow \|S\|_\varphi \leq \|T\|_\varphi. \quad (7)$$

$A$  が Hermitian のときは固有値は実数であるから、これを減少順に番号をつけたとき  $\lambda^\downarrow(A)$  であらわれ、増加順に番号をつけたとき  $\lambda^\uparrow(B)$  と書く。  $A, B$  が共に Hermitian のとき、  $A, B, A+B$  の固有値の間 基本的な関係は次の Lidskii - Wielandt の定理 ([1], [7], [5]) で規定される。

$$\lambda^\downarrow(A) + \lambda^\uparrow(B) < \lambda^\downarrow(A+B) < \lambda^\downarrow(A) + \lambda^\downarrow(B). \quad (8)$$

$S, T$  が一般の行列のときは、次の関係はよく知られている ([1], [5])

$$\lambda^\downarrow(S+T) \prec \lambda^\downarrow(S) + \lambda^\downarrow(T). \quad (9)$$

ここで  $\lambda^\downarrow(S)$  は  $S$  の特異値を減少順に番号をつけたものである。

この報告では、これ等の majorization 関係を援用して  $\mathcal{R}_\varphi, \mathcal{J}_\varphi$  の評価に関して幾つかの情報を与えようとするものであるが、未だ最終的なものとは言えない。

なお §2 の内容は北大応電研中村美浩氏との、 §§3-4 の内容はインド統計研究所 R. Bhatia 教授との討論に基づいている。

§2. 一般の正規行列  $A, B$  の場合.

先づ  $A, B$  が共に Hermitian のときは (8) に凸関数  
 法を適用し (4) を使うと

$$|\lambda^{\downarrow}(A) - \lambda^{\uparrow}(B)| \leq |\lambda^{\downarrow}(A-B)| \leq |\lambda^{\downarrow}(A) - \lambda^{\downarrow}(B)|$$

となるから (7) により次がわかる

$$\delta_{\varphi}(\|H\|) = \gamma_{\varphi}(\|H, H\|) = 1. \quad (10)$$

一般の正規行列の場合も、スペクトル分解と majorization より  
 Hoffman-Wielandt [6] は Hilbert-Schmidt norm  $\|\cdot\|_2$  に

$$\delta_2 = \gamma_2 = 1 \quad (11)$$

を示した。一方 Bhatia-Davis-McIntosh [3] は Fourier  
 解析, combinatorics を巧みに使って

$$\delta_{\infty} \leq \text{const} < \pi \quad (12)$$

を得ている。

**[定理 1]**  $\gamma_{\varphi} \leq 2.$

証明.  $\text{Re}(A), \text{Re}(B)$  に対し (10) をよ  $u$  (1) を使って

$$\|\text{Re}(A) - \text{Re}(B)\|_{\varphi} \leq \max_{\sigma} \|\text{Eig}(\text{Re}(A)) - \text{Eig}_{\sigma}(\text{Re}(B))\|_{\varphi}.$$

$A, B$  が正規なことにより

$$\text{Eig}(\text{Re}(A)) = \text{Re}(\text{Eig}(A)), \quad \text{Eig}_{\sigma}(\text{Re}(B)) = \text{Re}(\text{Eig}_{\sigma}(B))$$

であり結局

$$\|\text{Re}(A) - \text{Re}(B)\|_{\varphi} \leq \max_{\sigma} \|\text{Eig}(A) - \text{Eig}_{\sigma}(B)\|_{\varphi}. \quad (13)$$

となる。  $\text{Im}(A) - \text{Im}(B)$  にも同様にして、これ等を加えるとよい。 ■

$p$ -norm に関しては, 上の定数又は改良の余地がある. これを実行するため, 一般の行列  $T \in \text{Re}(T), \text{Im}(T)$  の  $p$ -norm の関連を調べよう. ここで基本的な関係式は

$$|\text{Re}(T)|^2 + |\text{Im}(T)|^2 = |T|^2 + |T^*|^2 \quad (14)$$

である.  $\text{Re}(T), \text{Im}(T)$  の固有値を  $\{\lambda_j\}_j, \{\mu_j\}_j$  とし

$$|\lambda_1| \geq \dots \geq |\lambda_n|, \quad |\mu_1| \geq \dots \geq |\mu_n|$$

とし,  $\Delta^\downarrow(T) = \Delta^\downarrow(T^*)$  に注意すると, Lidskii-Wielandt の式 (8) より

$$\{|\lambda_j|^2 + |\mu_{n-j+1}|^2\}_j < \{\Delta_j^2\}_j \quad (15)$$

$$\{(\Delta_j^2 + \Delta_{n-j+1}^2)/2\}_j < \{|\lambda_j|^2 + |\mu_j|^2\}_j \quad (16)$$

が出る. ここで  $\Delta^\downarrow(T) = \{\Delta_j\}_j$  である.

$p \geq 2$  のときは凸関数  $t^{p/2}$  を (16) に適用して, (4) より

$$\begin{aligned} 2^{-p/2} \sum_{j=1}^n (\Delta_j^2 + \Delta_{n-j+1}^2)^{p/2} &\leq \sum_{j=1}^n \{|\lambda_j|^2 + |\mu_j|^2\}^{p/2} \\ &\leq 2^{p/2-1} \sum_{j=1}^n (|\lambda_j|^p + |\mu_j|^p) \end{aligned}$$

$$\text{また} \quad \sum_{j=1}^n (\Delta_j^2 + \Delta_{n-j+1}^2)^{p/2} \geq \sum_{j=1}^n (\Delta_j^p + \Delta_{n-j+1}^p) = 2 \sum_{j=1}^n \Delta_j^p$$

であるから

$$\|T\|_p^p \leq 2^{p-2} \{ \|\text{Re}(T)\|_p^p + \|\text{Im}(T)\|_p^p \}. \quad (17)$$

$2 \geq p \geq 1$  のときは凹関数  $t^{p/2}$  を (15) に適用し, (5) より

$$\|\text{Re}(T)\|_p^p + \|\text{Im}(T)\|_p^p \geq \|T\|_p^p \quad (18)$$

が出る.

【定理2】  $\gamma_p \leq \max(2^{1/p}, 2^{1-1/p})$ .

証明.  $T = A - B$  に (17), (18) を適用し, (13) を使えばよい. ■

この評価では  $\gamma_1 = \gamma_\infty = 2$  となり定理1よりよくなっていない.  $\gamma_\infty$  に関しては次が成り立つ.

【定理3】  $\gamma_\infty \leq \sqrt{2}$ .

証明.  $n^2$  行  $n^2$  列行列  $A \otimes I - I \otimes B$  を考えよ. これは正規で,  $A, B$  の固有値を  $\{\lambda_j\}_j, \{\mu_k\}_k$  とおくと

$$\begin{aligned} \max_{j,k} \| \text{Eig}(A) - \text{Eig}(B) \|_\infty &= \max_{j,k} |\lambda_j - \mu_k| \\ &= \| A \otimes I - I \otimes B \|_\infty \end{aligned}$$

であるから, 一般に

$$\| A - B \|_\infty \leq \sqrt{2} \| A \otimes I - I \otimes B \|_\infty$$

すなわち

$$| \langle (A-B)x, y \rangle | \leq \sqrt{2} \| A \otimes I - I \otimes B \|_\infty \|x\| \|y\| \quad (19)$$

が全ての vector  $x, y$  に成り立つことを示せばよい.

$M$  の線形写像  $\Delta$  を

$$\Delta(T) = AT - TB$$

で定義する.

$$\langle (A-B)x, y \rangle = \text{tr} \Delta(x \otimes \bar{y}). \quad (20)$$

ここで  $x \otimes \bar{y}$  は rank 1 の行列  $[x_i \bar{y}_j]$  である.  $\Delta(x \otimes \bar{y})$  が rank  $\leq 2$  に着目すると

$$\| \Delta(x \otimes \bar{y}) \|_1 \leq \sqrt{2} \| \Delta(x \otimes \bar{y}) \|_2$$

であるから, (20) より

$$|\langle (A-B)x, y \rangle| \leq \|\Delta(x \otimes \bar{y})\|_1 \leq \sqrt{2} \|\Delta(x \otimes \bar{y})\|_2.$$

一方

$$\|A \otimes I - I \otimes B\|_\infty = \Delta \text{ の } (M, \|\cdot\|_2) \text{ に関する operator norm}$$

であるから

$$\begin{aligned} \|\Delta(x \otimes \bar{y})\|_2 &\leq \|A \otimes I - I \otimes B\|_\infty \|x \otimes \bar{y}\|_2 \\ &= \|A \otimes I - I \otimes B\|_\infty \|x\| \|y\| \end{aligned}$$

となり, (19) が出る. ■

### §3. A が Hermitian と B が skew-Hermitian の場合.

A, B の固有値を  $\{\lambda_j\}_j, \{\mu_j\}_j$  とし

$$|\lambda_1| \geq \dots \geq |\lambda_n|, \quad |\mu_1| \geq \dots \geq |\mu_n|$$

とする。A が Hermitian なることから  $\lambda_j$  は実数, B が skew-Hermitian なることから  $\mu_j$  は純虚数となるので

$$|\lambda_j - \mu_k|^2 = |\lambda_j|^2 + |\mu_k|^2 \quad (j, k=1, 2, \dots, n) \quad (21)$$

となることに注意する。

**【定理4】**  $\delta_g(H, \mathcal{S}H) \leq \sqrt{2}$  また  $\delta_g(H, \mathcal{S}H) \leq 2$ .

証明. (9) と (21) から

$$\begin{aligned} \lambda^\downarrow(A-B) &\prec \lambda^\downarrow(A) + \lambda^\downarrow(B) = \{|\lambda_j| + |\mu_j|\}_j \\ &= \sqrt{2} \{|\lambda_j - \mu_j|\}_j \end{aligned}$$

が成り, (7) より  $\gamma_g(H, \mathcal{S}H) \leq \sqrt{2}$  がわかる。  $\delta_g(H, \mathcal{S}H)$  の



評価は, (9) より

$$\{|\lambda_j|\}_j = \Delta^\downarrow(A) \prec \{\Delta^\downarrow(A-B) + \Delta^\downarrow((A-B)^*)\}/2 = \Delta^\downarrow(A-B),$$

同様に  $\{|\mu_j|\}_j \prec \Delta^\downarrow(A-B)$  が出て

$$\{|\lambda_j - \mu_j|\}_j \leq \{|\lambda_j| + |\mu_j|\}_j \prec \Delta^\downarrow(A-B)$$

となり, (7) から導かれる. ■

$\delta_p(\mathbb{H}, \mathbb{S}\mathbb{H})$  の評価は  $\sqrt{2}$  まで改良出来ること予想される.

$\delta_\infty(\mathbb{H}, \mathbb{S}\mathbb{H}) = 1$  は Sunder [13] が示したが, 一般の  $p$ -norm に関して

【定理 5】  $\delta_p(\mathbb{H}, \mathbb{S}\mathbb{H}) \leq \max(1, 2^{1/2-1/p})$  また  $\delta_p(\mathbb{H}, \mathbb{S}\mathbb{H}) \leq \max(1, 2^{1/2})$

証明. (21) に注意すると (15), (16) と同様に

$$\{|\lambda_j - \mu_{n-j+1}|^2\}_j \prec \{\Delta_j^2\} \quad (22)$$

$$\{(\Delta_j^2 + \Delta_{n-j+1}^2)/2\} \prec \{|\lambda_j - \mu_j|^2\}_j \quad (23)$$

が出る. ここで  $\Delta^\downarrow(A-B) = \{\Delta_j\}_j$  とする.

$p \geq 2$  のとき  $t^{1/2}$  は凸関数であるから (23) と (4) より

$$\sum_{j=1}^n |\lambda_j - \mu_{n-j+1}|^p \leq \sum_{j=1}^n \Delta_j^p$$

となり  $\delta_p(\mathbb{H}, \mathbb{S}\mathbb{H}) = 1$  がわかる. また (23) と (4) より

$$\begin{aligned} \sum_{j=1}^n |\lambda_j - \mu_j|^p &\geq 2^{1/2} \sum_{j=1}^n (\Delta_j^2 + \Delta_{n-j+1}^2)^{p/2} \\ &\geq 2^{-1/2} \sum_{j=1}^n (\Delta_j^p + \Delta_{n-j+1}^p) = 2^{-1/2} \sum_{j=1}^n \Delta_j^p \end{aligned}$$

となり,  $\delta_p(\mathbb{H}, \mathbb{S}\mathbb{H}) \leq 2^{1/2-1/p}$  が出来る.

$1 \leq p \leq 2$  のときは凹関数  $t^{1/2}$  を (22), (23) に適用して

(5) を使うことにより次が出ることよりわかる:

$$\sum_{j=1}^n \Delta_j^p \leq \sum_{j=1}^n |\lambda_j - \mu_{n-j+1}|^p, \quad \sum_{j=1}^n |\lambda_j - \mu_j|^p \leq 2^{1-1/p} \sum_{j=1}^n \Delta_j^p. \quad \blacksquare$$

§4.  $A, B$  が共に unitary の場合.

Bhatia - Davis [2] および Bhatia - Holbrook [4] は

$$\int_{\infty}(\mathbb{U}, \mathbb{U}) = 1 \quad \text{および} \quad \int_{\varphi}(\mathbb{U}, \mathbb{U}) \leq \pi/2 \quad (24)$$

を示し, さらに trace norm  $\|\cdot\|_1$  に関しては定数  $\pi/2$  が最良なことも証明した.

以下では, unitary で固有値がすべて上半平面にあるものの全体を  $\mathbb{U}_+$  で, またさらに全ての固有値がホ-象限にあるものの全体を  $\mathbb{U}_{++}$  であらわす.

unitary の組に対して Lidskii - Wielandt の関係式の役割を果たすのが次の Nudelman - Szvartzman ([11], [14]) である.

$A, B$  が unitary で, その固有値を  $\{e^{i\alpha_j}\}_j, \{e^{i\beta_j}\}_j$  として

$$\alpha_1 \geq \dots \geq \alpha_n, \quad \beta_1 \geq \dots \geq \beta_n \quad (25)$$

とある. もし

$$(\alpha_1 - \alpha_n) + (\beta_1 - \beta_n) < 2\pi$$

であれば unitary  $AB$  の固有値  $\{e^{i\theta_j}\}_j$  の偏角  $\{\theta_j\}_j$  は区間  $[\alpha_n + \beta_n, \alpha_1 + \beta_1]$  の中に選ぶことができる. このとき

$$\alpha_1 + \beta_1 \geq \theta_1 \geq \dots \geq \theta_n \geq \alpha_n + \beta_n$$

とあると, 次の majorization が成り立つ:

$$\{\theta_j - \beta_j\}_j < \{\alpha_j\}_j \quad (26)$$

$$\text{したがって} \quad \{\theta_j\}_j < \{\alpha_j + \beta_j\}_j \quad (27)$$

【定理6】  $\gamma_g(\mathbb{U}_+, \mathbb{U}_+) \leq \pi/2$  また  $\gamma_g(\mathbb{U}_{++}, \mathbb{U}_{++}) \leq \pi/2\sqrt{2}$ .

証明.  $A, B$  の固有値  $\{e^{i\alpha_j}\}_j, \{e^{i\beta_j}\}_j$  とし

$$\pi \geq \alpha_1 \geq \dots \geq \alpha_n \geq 0, \quad \pi \geq \beta_1 \geq \dots \geq \beta_n \geq 0$$

とする.  $B^*$  の固有値は  $\{e^{-i\beta_{n-j+1}}\}_j$  であるから  $AB^*$  の固有値

$\{e^{i\theta_j}\}_j$  を

$$\pi \geq \theta_1 \geq \dots \geq \theta_n \geq -\pi$$

とし, Nudelman - Svarzman (27) の  $\beta_j$  の代りに  $-\beta_{n-j+1}$  を  
使って, 凸関数  $|t|$  を適用して (4) より

$$\{| \theta_j | \}_j \prec \{ | \alpha_j - \beta_{n-j+1} | \}_j \quad (28)$$

が出る. 一方  $|s|, |t| \leq \pi$  で

$$|e^{is} - 1| \leq |s| \quad \text{および} \quad |s-t| \leq \pi/2 \Rightarrow |e^{is} - e^{it}|$$

であるから, (28) から

$$\{|e^{i\theta_j} - 1|\}_j \prec \frac{\pi}{2} \{|e^{i\alpha_j} - e^{-i\beta_{n-j+1}}|\}_j \quad (29)$$

となる.  $\Delta^\downarrow(A-B) = \Delta^\downarrow(AB^* - I)$  であるから, (29) から (7)

を使えば  $\gamma_g(\mathbb{U}_+, \mathbb{U}_+) \leq \pi/2$  が出る.

$\mathbb{U}_{++}$  に関しては,  $|s-t| \leq \pi/2$  の所で考えればよいので  
定数  $\pi/2$  が  $\pi/2\sqrt{2}$  まで小さく出来る. ■

$\mathbb{U}_{++}$  に関しては,  $p$ -norm ( $p \geq 2$ ) のときはもっと改良で  
きる.

【定理7】  $p \geq 2$  のとき,  $\gamma_p(\mathbb{U}_{++}, \mathbb{U}_{++}) = \delta_p(\mathbb{U}_{++}, \mathbb{U}_{++}) = 1$ .

証明.  $|e^{it} - 1|^p$  は  $|t| \leq \pi/2$  で凸であることに注目

よ、これを

$$\{\theta_j\}_j < \{\alpha_j - \beta_{n-j+1}\}$$

に適用して (4) より

$$\begin{aligned} \|A-B\|_p^p &= \sum_{j=1}^n |e^{i\theta_j} - 1|^p \leq \sum_{j=1}^n |e^{i(\alpha_j - \beta_{n-j+1})} - 1|^p \\ &= \sum_{j=1}^n |e^{i\alpha_j} - e^{i\beta_{n-j+1}}|^p \end{aligned}$$

がでて、 $\gamma_p(\mathbb{U}_{++}, \mathbb{U}_{++}) = 1$  がわかる。

$A = (AB^*)B$  に Nudelman-Swartzman (26) を適用して

$$\{\alpha_j - \beta_j\}_j < \{\theta_j\}$$

が出るので、上と同様に

$$\sum_{j=1}^n |e^{i\alpha_j} - e^{i\beta_j}|^p \leq \|A-B\|_p^p$$

がでて、 $\delta_p(\mathbb{U}_{++}, \mathbb{U}_{++}) = 1$  が出る。 ■

上の定理で  $1 \leq p \leq 2$  のとき どうなるかは未だ判らな。この他にも、さらに  $A, B$  の固有値の分布域を適当に制限することにより、幾つかの結果が出るが省略する。

全般に関する survey として R. Bhatia の草稿 'Perturbation of eigenvalues' 150 頁, 1985 が大変参考になる。

### 文献

- [1] Ando, T., Majorization, doubly stochastic matrices and comparison of eigenvalues, Lecture Note Sapporo, Japan 1982.
- [2] Bhatia, R. and Davis, C., A bound for the spectral varia-

- tion of a unitary operator, *Linear Multilinear Alg.*, 15(1984), 71-76.
- [3] Bhatia, R., Davis, C. and McIntosh, A., Perturbation of spectral subspaces and solution of linear operator equations, *Linear Alg. Appl.* 52/53(1983), 45-67.
- [4] Bhatia, R. and Holbrook, J.A.R., Short normal paths and spectral variation, *Proc. Amer. Math. Soc.*, 94(1985), 377-382.
- [5] Gohberg, I.C. and Krein, M.G., Introduction to the theory of linear non-selfadjoint operators, *Transl. Math. Monographs* 18, Amer. Math. Soc. 1969.
- [6] Hoffman, A.J. and Wielandt, H.W., The variation of the spectrum of a normal matrix, *Duke Math. J.* 20(1953), 37-39.
- [7] Lidskii, V.B., Inequalities for eigen- and singular values, Appendix to Gantmacher's *Theory of matrices* 2nd ed. pp.535-559.
- [8] Marshall, A.W. and Olkin, I., *Inequalities: Theory of majorization and its applications*, Academic Press, 1979.
- [9] Mirsky, L., *Symmetric gauge functions and unitarily*

- invariant norms, *Quart. J. Math.* (2), 11(1960), 50-59.
- [10] von Neumann, J., Some matrix inequalities and metrization of matrix space, in *Collected Works IV*, 205-219, Pergamon Press, 1961.
- [11] Nudelman, A. and Svarzman, P., The spectrum of the product of unitary matrices, *Uspehi Mat. Nauk* 13 (1958), no.6, 111-117.
- [12] Schatten, R., *Norm ideals of completely continuous operators*, Springer, 1960.
- [13] Sunder, V.S., Distances between normal operators, *Proc. Amer. Math. Soc.* 84(1984), 483-484.
- [14] Thompson, R.C., On the eigenvalues of a product of unitary matrices I, *Linear Multilinear Alg.* 2(1974), 13-24.
- [15] Wielandt, H.W., An extreme property of sums of eigenvalues, *Proc. Amer. Math. Soc.* 6(1955), 106-110.